

実習を終えた後、私は、本当に教師を目指すのか、それとも教師になりたくないと思ってしまうのか、楽しみと不安の入り交じっているような気持ちで、実習に臨みました。

実習の初日はわからないことだらけでした。授業の行い方、進め方、生徒との関わり方、生徒の名前など、ほとんどわからない状態で、休み時間でさえどうしていいのかわかりませんでした。しかしそんな時、実習先の先生方が学校のことをいろいろ教えてくださり、日が進むにつれて少しずつ慣れていくことができました。また生徒の名前を覚えるにつれて、生徒と関わることも多くなっていきました。

ここでまず一つ感じたのは、「知っている」ことの大切さです。

例えば、初めて関わる生徒に対しては、生徒も教師も少し緊張しています。しかし、その初めての関わりの中で、生徒の名前を呼ぶことによって「君のことを知っている。」と示すことができます。そうすることで生徒が心を開いてくれることもあります。また、その会話の中で生徒のことをいろいろ知り、次会った時にはそれをさらに広げていくことで、コミュニケーションの幅が広がり、そのコミュニケーションこそが生徒と教師の信頼関係に繋がると感じました。この実習で、そのようにして生徒とコミュニケーションを取ってきた私にとって、何かを知っているというのは、とても重要なポイントであり、名前を覚えることの大切さを実感することができました。

授業の面では準備の大切さを学びました。準備といっても、授業の進め方や、説明のしかたや、雑談であったりと様々ですが、どれも大切です。今回実習生として、教師の立場で、授業を参観させていただいたことで、先生一人ひとり違う工夫があることに気づきました。そういった工夫も準備の一つです。私はこの実習で、授業の良し悪しは、どれだけ準備をしていくかで決まると感じました。今後教師になり授業をするときは、しっかり準備をしたうえで、自分の最善の状態を挑まなければなりません。

また実習では、この他にも様々なことを体験し学ぶことができましたが、その中でも最も大きな意味をもったのは、実習を通し、教員になる決意が固まったことです。このように思えたのも、母校で実習を行うことができたからだと思います。ありがとうございました。